

近年のパプア・ニューギニア南部高地の豚祭り

—儀礼的交換を支える経済的、社会的、政治的背景

吉田 正紀

Masanori YOSHIDA. The Pig Festivals of Recent Times in Mendi in the Southern Highlands of Papua New Guinea: The Economic, Social and Political Background of Ceremonial Exchange. *Studies in International Relations* Vol.39, No. 1. October 2018. pp. 67-76.

The writing of this paper was prompted by What Gifts Engender: Social Relations and Politics in Mendi, Highland Papua New Guinea (1986) by Rena Lederman. Despite the fieldwork that I conducted on the Pig Festival (mok ink) in Mendi in 1974, and despite my own analyses of anthropological research from the 1970s on the same topic, I have to conclude that I did not fully understand the economic, social and political processes behind the Festival until I read Lederman. This paper, therefore, sets out my own understanding of the Pig Festival today in the light of my reading of her work.

1. はじめに

筆者は1970年代初頭、パプア・ニューギニア高地にみられる豚祭りに関する先行研究を検討・分析したり、実際にニューギニア南部高地メンディで豚祭りを見聞することはできたが（吉田正紀 1972、1973、1974）、豚祭りの社会政治的背景や祭りのプロセスを詳細にとらえることができなかった。そこで、1970代後半、同じメンディで、豚祭りや儀礼的交換やそれらを支える社会関係と政治を調査したレナ・レーダーマン（Lena Lederman 1986）の研究をとりあげ（注1）、高地文化の中で、メンディの豚祭りを再度検討したい。

レーダーマンは、従来あまり研究がなされてこなかった南部高地メンディで実施されている豚祭りの背景にある独自の社会関係、交換取引、リーダーシップなどに注目した。さらに、ライアンのメンディ地域の先行研究（Ryan 1961）を踏まえ、また中央高地研究をリードしてきたストラザン夫妻（Strathern 1969, 71, 78）の直接的な指導を受けながら、高地社会の民族誌を幅広く検討し、メンディの祭りの位置づけとその比較民族誌的考察を行った（図1）。

（1）高地における人類学的研究とその関心の変化

メンディの豚祭りに関するレーダーマンの最新の研究を紹介するまえに、ニューギニア高地における人類学的研究やその関心の変化について若干触れておく。

植民地時代から1960年代まで、ニューギニア高地では、集団間の暴力を伴う種族間の対立が日常茶飯事であったが、その後オーストラリア植民政府によって戦闘は全体として抑圧された。その結果、高地の社会環境は著しく変化してきた。

人類学の関心は、1960年代以降、アフリカの父系出自集団モデルとの対比、父系親族集団の存在など出自理論にあったが、70年代になると、交換に基づく社会モデルや集団の連帯へとその関心がシフトし始めた（Lederman, 1986: 19-20）。

中央高地にみられる儀礼的交換は、西太平洋のトロブリアンド諸島の「クラ」、アメリカ北西海岸の「ポトラッチ」のように、1970年代以降、A. ストラザン（1969, 1971, 1972, 1978）やM. メギット（Meggitt, 1965, 1977）らの研究を通じて、詳細に知られることになった。とくに、ニューギニア高地における人類学的研究では、氏族によ

る大規模な富の儀礼的交換やリーダーであるビッグ・マン (Big man) の資質や政治的な力が注目され、またニューギニア高地内や他地域との対比がなされた。

サーリンズ (Salins, M. 1963) はビッグマンと彼の氏族員の関係が搾取的であるのに対し、メギットは成功したビッグマンは、仲間から富を奪わず、むしろ分配すると対比する。ストラザンも彼が調査したマウント・ハーゲンの人たちが、自らの集団の資源に依存せず、むしろ広く交換パートナーとのネットワークの維持を図るという。高地のビッグマンの生き方は、氏族員が集めた貴重品に対する支配や他の集団との交換競争を通じて、自らの威信を誇示することにあることが判明してきた (Lederman 1986: 177)。

1960年代、すでに前項で紹介したように、豚の屠殺や祭りの頻度をエコシステムとの関係でとらえようとした研究がなされた。この生態学的研究では、豚の群れの大きさがコントロールできなくなったとき、豚祭りが行わると分析した。儀礼的な豚祭りは、定期的に大量の豚肉を消費することで、豚の自然的成長をコントロールし、人間と

環境の適応を図る「環境の儀礼的規制」としてとらえられた (Rappaport, R. 1968)。

一方、このような分析に対して、「豚サイクル (豚の定期的成長と減少)」は、自然現象ではなく、社会集団間の交換という政治的な意図をもった豚の飼育・管理と関係する。すなわち、豚の儀礼サイクルは、豚の生産と交換 (政治)、豚の管理と使用という二つの戦略から成り立っているという主張がなされた (Lederman 1986: 175-178)。

1970年代、南部高地メンディにおけるレーダーマンの研究は、このような先行研究の中から生まれたものであるが、従来の氏族間の公的な交換やそこでのリーダーの役割よりも、個人を通じたネットワーク (ツェム) 関係が、豚祭りの実施に重要な役割を果たすことを証明することで、これまでの研究と異なる側面を強調した。

(2) メンディの社会関係を貫く組織原理： ツェム (twem) とセム (sem) の関係

レーダーマンは、メンディの祭りの目的や構成や意味を考える上で、ツェムとセムの関係が重要

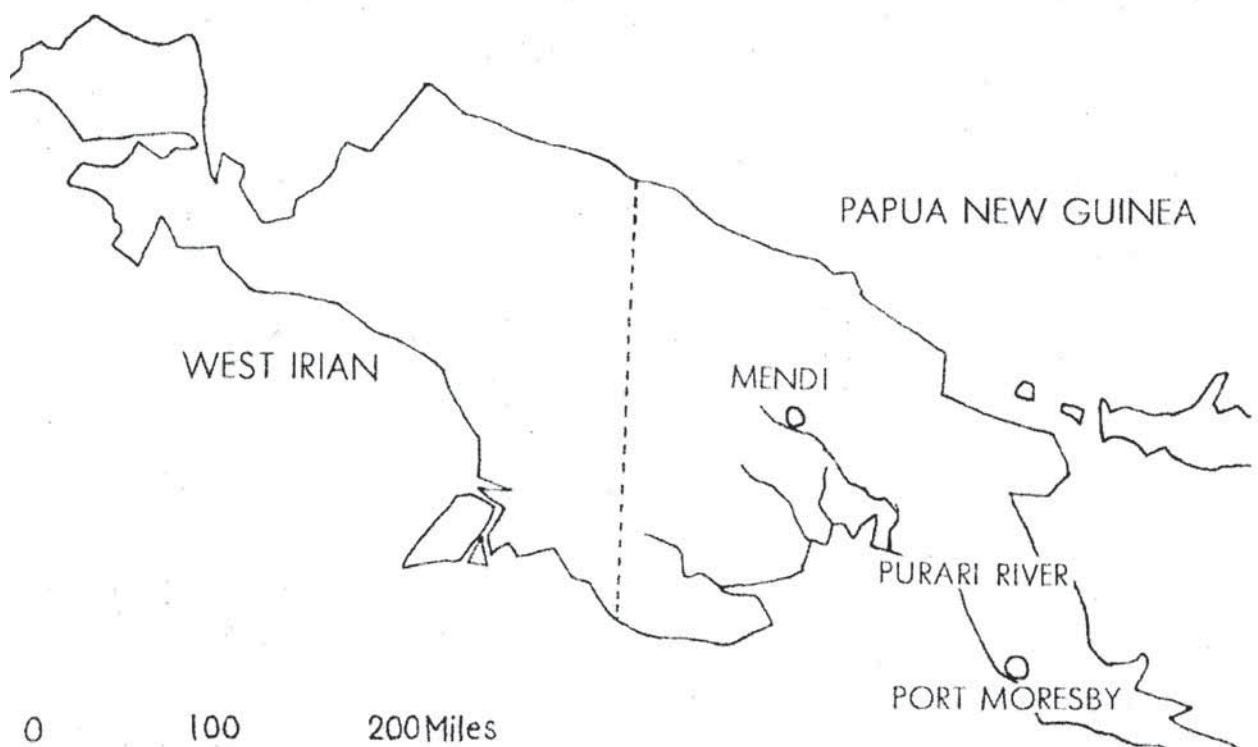


図1 パプア・ニューギニア

な役割を果たしていることに注目する。この二つの人間関係の中に存在する個人の行動は、祭りの政治学のなかに具体的に表出される。

ツェムは個人的な富の交換パートナーである。彼らはクラン（氏族）の同じメンバーでも、親族名称で呼ばれることはないが、豚や真珠貝や貨幣のような流動資産を取引（交換、循環など）する間柄である。その取引は、自己を中心として広がり、限界のないネットワークを形成し、比較的永続的な関係を維持する。常に富の循環を奨励するメンバー間の関係は、平等的かつ包括的で、男女、未婚者、年配者、寡婦など誰でも参加可能である。この関係に含まれる者は氏族の祭りの間、展示するための貴重品を調達し合うという共通の認識でつながれている。セムの関係とは矛盾したり、援助し合ったり、対立する関係なのである。

セムは特定の個人を越えた氏族のような父系出自集団を構成する。彼らは土地へのアクセス権があり、儀礼的交換において、男子集団の中核部分をなす。資産、産物、富への権利と支配に関する慣習によってつながりをもつ人たちである。この集団間の互惠関係が氏族のメンバーの団結を示す。しかし、集団の構造、リーダーシップの在り方、地域の生態学等によって、中央高地のなかでも氏族の活動にはバリエーションが見られる（Lederman 1986:58-59,62-66）。

（３）ニューギニア高地の儀礼的交換の地域的タイプ

初期の研究は、人口密度の高い中央高地の北、とくに西の Mae・Enga (Mt.Hagen) 地域でなされた（図 2）。この地域の儀礼的交換は、氏族が取り仕切る仕事であった。さらに彼らの交換取引は鎖状につながり、さらに豚や貴重品が氏族から氏族へ数ヶ月かけて移動する極めて長期なものとなる。しばしば人生をかけた交換取引となることもある。

一方、Chimbu や Kuma のような中央高地の東の地域では、祭りは個々の氏族内で行われた。その祭りでは、豚あるいは野菜、その他の貴重品が定期的に配分されるが、その配分は連鎖的つな

がり形成しない。これらの社会の儀礼的交換では、氏族員に支援されたビッグマンが、集められた貴重品を数え、その取引の歴史的背景や集団間の政治的関係を説明するスピーチをする。送り手のビッグマンは受け手のビッグマンに蓄積された富を与える。それらの富はさらに受け手の氏族員に再配分される（Lederman 1986:63-64）。

1970年代に入り、南部高地での研究が開始されると、これまでの研究を発展させるような人類学上の関心に変化が現れた。これまでの中央高地北部における研究では、交換にみられる集団的行動に着目されたが、南部高地の研究では、交換が個人のために行われていることが明らかになってきたからである。

ストラザン（Strathern 1978a）は、北部のマウント・ハーゲン地域の Melpa 族と南部の Wiru 族や Wola 族の事例を対比した。南部の事例で、儀礼的交換で、集団より個々の交換パートナーである姻族との二者関係が時として重要であること、これらの社会ではビッグマンが支配する氏族は重視されず、中央集権的でなく、拡散的であることを発見した。

このような理由から、ストラザンはニューギニア高地の交換には、集団の名のもとに行われる「構造モデル」と「個人中心的な分析モデル」があることを提示した。

とはいえ、メンディの場合、「集団モデル」と「個人のネットワーク」が文化的に併存していること、つまり個々の交換パートナーと共同的なクランのパートナーの双方がメンディの政治を形作り、社会生活の構造原理ないしモラルとなっていることをレーダーマンは明らかにした。それゆえ、ストラザンのモデルがメンディにうまく適用できないと指摘する。

さらに、レーダーマンは、ストラザンが提示した高地の豚祭りやビッグマンや儀礼的交換のタイプ化（1968a）を検討し、メンディとの相違を指摘する（注 2）。メンディのビッグマンは、Enga や Mt.Hagen などの西部高地ほど際立ったものではない。彼女が観察した Sankere の豚祭りの事例で、豚を一番多く屠殺したビッグマンの屠殺数は 27 頭である。むしろ東部の Wiru のビッグマ

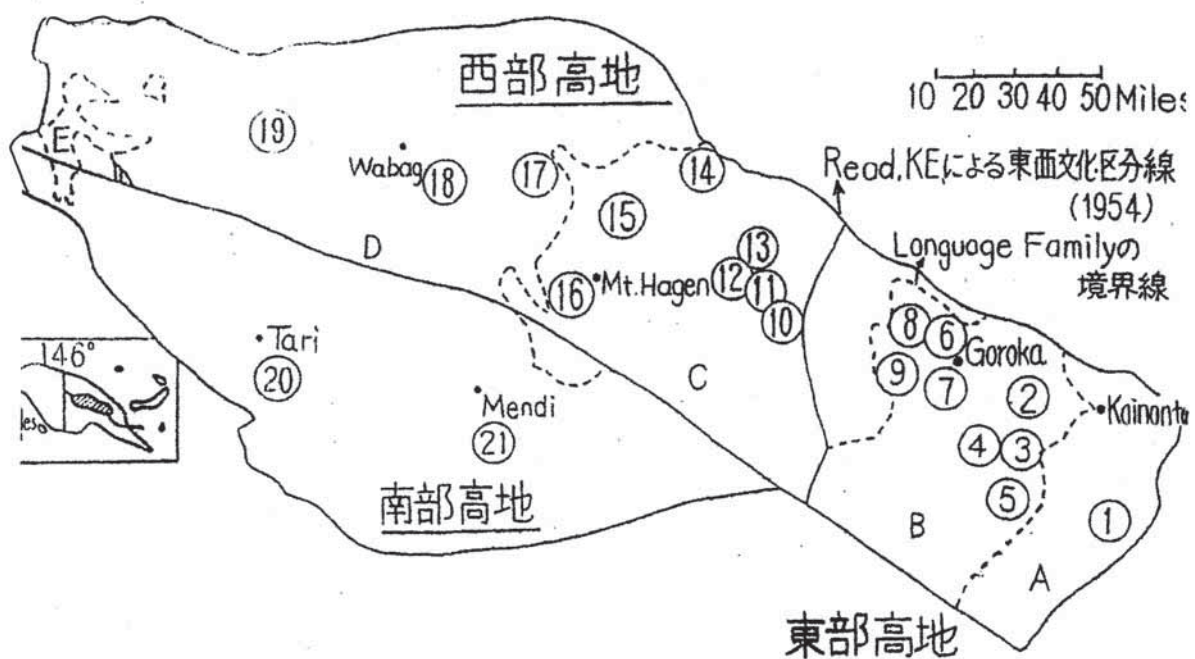
ンに近い規模である (Lederman 1986:207)。

メンディでは、豚屠殺と他の貴重品の定期的分配は人々の政治経済生活の目標であるが、クランにおける交換は、Mt.Hagen などの連鎖した取引の形態をとらない。それゆえ、メンディのクランが主催する豚屠殺は大規模でも、頻繁でもない。

メンディにおいて殺された豚は「自家生産」というより、大部分は「金融」の手段を用いて集められたものである。それゆえ、すでに見てきたように、ギフトの負債 (gift-credit) の返済は祭り

の準備のなかで極めて重要となる。メンディにおける交換パートナーへのギフトの依存は誰もが行うことである。またこの「金融」は広く、分散して行われている。メンディのツェム関係の強さはイベントの規模に反映している。

メンディの氏族メンバーはビッグマンの支援者ではなく、自らビッグマンと一緒に富を展示するし、ギフトが全体として与えられても、ビッグマンや集団が保持するわけではなく、個々のメンバー間で配分される。マウント・ハーゲンのように連



Eastern Family

East Central Family

Central Family

D : West Central Family

E : Western Family

S. A. Wurm 1961

主 な 種 族 名

西 部 ・ 南 部 高 地

東 部 高 地

- ① Tairoa
- ② Kamano
- ③ Usurufa
- ④ Jate
- ⑤ Fore
- ⑥ Gahuku-Gama
- ⑦ Bena Bena
- ⑧ Gururumba
- ⑨ Siane

- ⑩ Chimbu, Kuman
- ⑪ Nondugl 地域
- ⑫ Kuma
- ⑬ Manga
- ⑭ Maring (Tsembaga)
- ⑮ Hagen (Melpa, Mbowamb)
- ⑯ Gawigl
- ⑰ Kyaka
- ⑱ Enga
- ⑲ Ipili-Paiela
- ⑳ Huli
- ㉑ Mendi

図2 パプア・ニューギニア中央高地の主な種族分布

帯する集団間の互惠的政治関係が重視されるわけではない。ウィルのように重視される関係が個々の親族や姻族とのネットワークだけというわけでもないという。

このような二元性は以下のようなメンディの公の交換儀礼のなかにも見られる。メンディでは、貴重品はハーゲンにおけるように、まず列をなして展示され、リーダーによって数えられる。しかし数時間後、Wiru におけるように、それらは個々の贈り手から受け手へ公に分配される。全体の流れのなかで、個人のネットワークと集団の関係の双方を表現するのがメンディ社会の特徴である。それゆえ、高地社会の交換取引には比較研究によって、バリエーションがあることが理解されるようになった。(Lederman 1986:64-65).

（４）メンディの祭りのプロセスと政治学

１）モク・インクの目的

メンディ地域の豚祭りはモク・インク (mok ink) と呼ばれる (Ryan, 1972)。豚祭りは、近隣の敵対集団に自らの氏族の規模と団結と行動力を誇示するために行われる。それは氏族の生産的努力（主に女性の労働・豚飼育）と氏族の男女の姻族や友人との幅広い交換関係によって可能となる。実際女性労働の価値と姻族との交換関係を維持・管理することは祭りの重要なテーマとなっている (Lederman, 1986 : 1)。

モク・インクは、10年以上もかけて準備され、豚屠殺（サイレ、sai le）でその頂点を迎える集団儀礼である。クランさらに種族の集団内と集団外にみられる対立と連帯の状況なかで、リーダーであるビッグマンにとって、自らの集団の団結のための努力と役割のみならず、個々の交換ネットワークを展開する通常の氏族員たちとの関係が成功の秘訣である。

リーダーマンはメンディの北部で1979年12月24日に行われた祭りを実見する。主催の種族の男性122人によって、672頭の豚が殺された。さらに近隣から訪れた人たちによって1400頭もの豚が屠殺された。現地で料理された豚肉が数千の親せきや友人たちに分配され、祭りのメインイベ

ントとなった。しかし祭り自体は長い準備と様々なイベントが伴うものであった。

２）「十分な豚」とは何か

人々にとって、豚祭りではどのくらいの豚が殺されるかということより、どの集団との連帯ができたか、あるいはできなかったかというネットワークの形成が最大の関心である。メンディで「十分な豚」を持つことは、多くの豚を育てることができる十分な時間があることを必ずしも意味しない。人々はサイ・レのときに多くの豚が手元にあるという意味で「十分な豚」をもっていることではない。どれだけ他人の豚に手を出せるのかが問題なのである。個人は自分のために豚や貴重品を用意してくれる姻族（交換パートナー）との関係ができたとき、「十分な豚」をもったことになる。

それゆえ祭りは、氏族の組織やリーダーの力、目的意識の維持、比較的長期間にわたる交換パートナーとの活動などを含む過程である。祭りはツェムとセムの関係を儀礼で示すことになる点でユニークであり、ネットワークと公的集団の緊張を伴う「土着の遊び」とであるといえる。(Lederman 1986:200)

３）祭りの準備—パレードと富の返済

1950年代に祭りを実見したライヤン (1961) によると、祭りの主催集団は、長い儀礼小屋 (sai anda) の建設や、ヒクイ鳥や豚や牛の殺戮や貨幣や真珠母貝の展示の分配をとまなう儀礼 (ant senk) ないしパレード (in tomp) を行う。これらの儀礼から本格的な祭りまで数年かかることがあるという。その後に行われるパレードの際に、ホスト側はゲストに祝いのギフト sem onda (真珠母貝と貨幣) を贈ったり、宿泊や食事を提供する。祭りの時に用いる装飾品の使用权を得たり、サツマイモやサトウキビなどの食糧の提供を依頼するためでもある。

祭りの準備として行われるパレード (Sai pombe) は、モク・インクの始まりを示す重要なイベントである。(写真3) 豚屠殺はそれから1～2年後に行われるからだ。祭りの計画は交換パートナー（妻の親せき、結婚した姉妹や娘の親

せき)との関係に影響を及ぼす。祭り前に、ホストはこれら交換パートナーに、祭りの前に返却する約束で、豚や真珠母貝のような利子を生む貴重品(soan)を貸し出す。Sai pombeのあとはさらに盛んになる。ホストは個人的に行なっていた豚の屠殺や牝豚の妊娠を差し控える。むしろ豚の肥育に精を出す。

祭りの数か月前になると、男たちは姉妹、娘、妻の親せきなどに世話してもらっている豚や預けてある貴重品(soan)を回収し始める。その際に彼女らの貢献を認める貝や貴重品の公の展示が行われる(mok yari)。それらはsoanに付加価値をつけた贈り物の返済となる。彼女ら以外の多くの通常のツェムにも返済をしなければならない(Lederman 1986: 180)。

4) 豚屠殺と豚肉の料理・分配

ゲストたちは生きた豚が儀礼場に展示される前

にやってくる。豚屠殺の当日、ホストの豚が屠殺され、豚肉の半身(kelaepe)が儀礼場に建てられた長さ数十メートルに伸びた数本の平行した柱に吊り下げられる。その数はホストのビッグマンによって数えられる。(写真1、2、4)

豚肉は長い地炉でまとめて調理される。その調理には数時間もかかる。調理された豚肉はホスト集団の男たちによってさまざまなサイズに切り分けられ、集まった親せきや交換パートナーに分配される。人々はそれを持ち帰り、再度調理したり、さらに他の交換パートナーに再配分する。仲間のグループもこのイベントに合わせて豚を殺戮し、仲間たちに分配する。メンディ谷では、数日のうちに500から2000頭もの豚が殺され、数千の人たちの間に分配される。(Lederman 1986: 180-181)。

5) 豚祭りの変容—豊穡儀礼と男性支配の衰退



写真1 儀礼小屋 メンディ 1970



写真2 儀礼場と豚の展示 メンディ 1970



写真3. パレードする少女 メンディ 1970



写真4. 豚肉の展示 メンディ 1970

(撮影者 吉田正紀)

メンディのモク・インクがそれほど盛大でなかった1960年代まで、祭りの前に多くの豊穡儀礼が行われていた。神話の起源神話と結びついたこの儀礼は、1950年代から60年代 *tim* と呼ばれ、メンディの北から南にかけ盛んであったという。8年くらいの間隔で実施されるこの儀礼は、階層を越えて、父系氏族や敵対する氏族を含む2組の半族（グループ）によって行われていた（Lederman 1986:46）。

この儀礼では、屠殺された豚肉が親せきのためだけでなく、彼らの祖霊（*temo*）へ贈り物として捧げられた。豚を殺した人は、豚の血を小さな小屋の中に置かれていた石に代表される祖霊に捧げたという。この行為は人々に不幸をもたらすかもしれない祖先の嫉妬から身を守るためだと言われている。（Lederman 1986:182）。

メンディの人々の間には父系出自の観念があり、自らを始祖の子孫とみなし、メンバーを親族用語で呼び合うが、実際のところ、集団の団結と持続には男性の力が決定的なものとなっている。たしかに共通した男子祖先をもつことは集団の団結の具体的表現であり、それゆえセム関係は個人の人生と日常生活を越えた永続的な構造を手に入れたことになるのだが、この集団の継続性は男性によって作り出されたものと考えられている。世代を越えた土地の移譲も男性間で行われる。メンディの人々と土地の絶え間ない再生産を目指していた豊穡儀礼は最近まで男性によって担われてきた。

儀礼への参加はクランの境界を越えるもので、異なったクランの男たちを区分するセムの団結よりも、全体として男子の団結を重視するものである。この儀礼ではジェンダーの区別が社会全体のものとなり、少年がたまに参加することがあっても、女性の参加は見物人としても厳しく制限されていた（Lederman 1986:58-59）。

しかし現在これらの儀礼はみられなくなってしまった。メンディの古老たちも、それはモク・インクの中心的特徴ではないという（Lederman 1986:181）。集団や男性の威信の戦いである豚祭りや儀礼的交換はその規模が大きくなるにつれ、本来の意図が変容し、女性を含む数多くの人間を巻き込まなくては、実施できないものとなってきた

たことを反映しているようだ。

（5）今日のメンディの祭り

メンディの人たちの祭りへの意見はさまざまである。祭りにおける贈り物の展示の重要性を強調する者、祭りの意義は妻や親せきに贈り物を贈ることにあるという者がいる。さらに、モク・インクによって、真珠母貝と豚を蓄積することができるとか、豚肉をツェム・パートナーに与えることができるとか、ビッグマンの地位を高めることができるとか、メンバーもそれによって他の集団から侮辱を受けないなどの利益があると述べる老人たちがいる。すなわち、祭りでその集団が強くなり、多くの集団と連合していることを、敵対する集団に提示することができるといった祭りの政治的目的が上げられている（Lederman 1986:181）。

祭りをを行う集団は絶えず、他のグループとの競争（*tanol*）の状況に置かれている。豚を屠殺するサブ・クランは他のサブ・クランと屠殺する豚の数をめぐって競争する。人々は、祭りを他の集団に対して、自らの種族全体の評価をあげるため、富を集め、分配する能力を身に付けようとする。祭りは「土着の遊び」である一方、「威信の戦い」ともいえる。（注2）

（6）メンディの祭りの構造

すでにふれた、ビッグマンの役割や豚飼育や貴重品の交換の在り方をめぐるストラザンの「自家生産」と「金融」のタイプ化は、メンディの祭りの構造を理解するうえで、極めて有効なものである（注3）。一般に高地社会のビッグマンは、儀礼的イベント、交換取引、戦闘など、自らのクランの集合的行動を指揮する。集団の名のもとに、組織化された儀礼的交換では、誰もが貴重だと感じる物に対して、少数のビッグマンが支配する可能性がある。ビッグマンと他の通常の氏族員や女性との関係には階層差があることが見てとれる。

しかし、メンディは *Melpa* や *Enga* のようなクランを通じた分配を重視せず、ツェム関係にある老若男女が自由に交換取引に参加できるオープ

ンな社会である。ストラザンのいう「金融」のスタイルの取引が特徴的で、ツェム間の取引が好まれる。ツェムは同じクランのメンバーではないが、同じ村か他の村に住む他のクランの姻族である。メンディの人々の行為は個人的であり、大きな集団のためという目的はない。それゆえ、ネットワークに基づくクレジットスタイルの贈与交換が重視される地域では、労働の産物や他の貴重品の支配が特定の者に集中しない特徴がある。それゆえ、ツェムの関係の中では少数の男が多くの人を支配することはほとんど起こりえない。個人的な交換ネットワークを形成し、個人の自立性が高いメンディのような地域では、クランの構造も影響を受け、ビッグマンの力も制約を受けている (Lederman 1986:209)。

(7) メンディの祭りと女性の力

モク・インクで殺された豚は、クランの成員や彼らの妻の労働によって生み出された「自家生産」ではない。多くは豚屠殺の直前に、さまざまなツェム・パートナーから手にいれたものである。祭りのかなり前からあった豚もネットワークを通じて得ている。多くの取引が短期間になされる。豚の大部分は真珠母貝や貨幣などの贈り物と交換したものである（実際は豚を飼育してくれた労働サービスへの利子付きの支払い） (Lederman 1986:210)。

メンディでは、パートナーである妻の集団や妻の親せきは、夫から貸し与えられた豚に共同の権利を持っている。彼の妻の親せきは適切な富の支払いがなされなければ、社会的義務を果たさなかったとしてこの取引から身を引く。このような暗黙のルールがあって、ネットワーク間に富が流通する。妻の親せきに利子付きの返済が受け取れることを期待させて、負債を増やすように仕向けることさえもある。

兄弟と姉妹は彼らの集団が行う豚屠殺では、協力して、姉妹の親せきに豚肉を与える。それはツェム関係の倫理である。それゆえ、姉妹は彼女たちの兄弟の富の展示の成功に関心をもっている。祭りの間、メンディの女性や彼女の親せきが兄弟に

富を与えるとき、彼女たちは夫の媒介者としてではなく、それらの贈与に彼女らの権利を主張できる、自立した人間として登場する (Lederman 1986:211)。

また妻として自分たちが育てた豚を支配する権利を自覚している。それゆえ、モク・インクのために豚を生産する女性の労働は価値あるものと認められている。彼女たちは夫から利子としての真珠貝を受け取り、それを豚屠殺の前に親せきに再配分するとき、それらの行為についての関与が正式に認められている。それゆえ、女性たちもモク・インクに関心を示す。個人の自立性が重視されているため、イベントは男女の協力なしには行うことができない。モク・インクにおいて、男性は女性とツェムの関心を惹きつけることによって、それを可能にするのである (Lederman 1986:212)。

終わりに

ニューギニア高地の社会は、ビッグマンの強い男性支配の社会といわれたり、平等主義的であると相対立する見方がある。表面的には男子の威信をかけた戦いが繰り広げられているが、戦闘や交換取引や豚祭りやリーダーシップの在り方に地域的にヴァリエーションがみられた。最後に、広い女性を通じたネットワークへの依存するメンディの社会では、女性の力とネットワークがなければ、男性の威信をかけた豚祭りは成立しないことは、実質的には男性優位というより、相対的に平等な男女関係が成立しているのではないかと考えられる。

(注1)

1986年ケンブリッジ大学出版より、『何が贈答品を生み出すのか、パプア・ニューギニア高地のメンディにおける社会関係と政治』を出版したリーダーマン (プリンストン大学教授) は、夫とともに1977年9月より1979年4月、さらに1983年に3カ月かけ、南部高地のメンディで現地調査を実施した。筆者がメンディを訪れた7年後、ライアンがメンディ地域における最初の人類学的研究 (1961年) から20年余経っている。

（注2）

2012年8月、42年ぶりにメンディを再訪した。当時私を現地を紹介してくれたマプーンや祭りを案内してくれたフェビアンに合うことができた。彼らに祭りは今も行われているのかと問うと、最近祭りが行われた場所に案内してくれた。蒸し焼きをした石ころやタンケットの葉が散らばっていた。マプーンは「祭りには男の威信がかかっているので、なくならない」と答えた。

（注3）

ストラザン（1969a）は、中央高地の人々が行う儀礼的交換のあり方を「自家生産」と「借入ないし金融」とに分類し、それらの戦略から高地の政治のバリエーションを理解しようとした。「自家生産」は「儀礼的交換への参加者が、豚を育てる自らの労働力に依存する戦略」であり、「金融」は「参加者が他の人間との多くの互惠的關係に入り、必要とするものを彼らから手に入れ、後に返済する」という戦略である。ストラザンは、高地社会ではどちらの戦略を重視するかによって、異なってくる。

「自家生産」を重視する Wiru や Maring などの社会では、ビッグマンと他の村の男たちとの間に大きな相違はない。ビッグマンは富の蓄積に制約があり、展示する貴重品の規模も小さく、特別な人間ではない。一回の豚祭りで15頭以上の豚を屠殺してはいない。

一方、Melpa や Enga などの「金融」を重視する社会では、ビッグマンの交換儀礼におけるビッグマンの力は際立っている。この地域のビッグマンは、祭りで100頭もの豚を殺す。彼は自らのクランがもつ「自家生産」を越えた資源を、「金融」システムによって、他の集団から調達できるし、moka や te の交換ネットワークでつながっている。

参考文献

Lederman, Rena

What gifts engender-Social relations and politics in Mendi, Highland Papua New

Guinea.

Cambridge University Press. 1986

Meggitt, M.

The Lineage System of the Mae-Enga of New Guinea. Barnes & Nobles. 1965

Blood is Their Argument: Warfare among the Mae-Enga Tribesmen of the New Guinea Highlands. Mayfield. 1977

Rappaport, R. *Pigs for the Ancestors.* New Haven: Yale University Press. 1968

Ryan, D'A

Gift Exchange in the Mendi Valley.

Ph.D. Dissertation, Sydney University 1961

"mok-ink". *Encyclopaedia of Papua New Guinea.* 1972: 788-789

Sahlins, M.

"Poor Man, Rich Man, Big Man, Chief" *Comparative Studies in Society and History.* 1963 (5)285-303.

Strathern, A.

"Finance and Production: Two Strategies in New Guinea Highlands Exchange Systems" *Oceania* 1969a, 40:42-67.

The Rope of Moka: Big Men and Ceremonial Exchange in Mount Hagen, New Guinea. Cambridge University Press. 1971

One Father, One Blood. Tavistock 1971

"'Finance and Production' Revisited: In Pursuit of a Comparison." *Research in Economic Anthropology.* 1978a 1:73-104.

吉田正紀

『ニューギニア高地の文化複合—儀礼を中心とした一考察』

立教大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程 修士論文 1972

- 「ニューギニア高地の豚祭りー研究史と問題点」
『史苑』1972、33(1)65-81 立教大学史学会
- 「ニューギニア高地の豚祭りーその地域的タイプ」
『国際宗教ニュース』1973、14（1）23－34
国際宗教研究所
- 「ライ溪谷の豚祭りーパプア・ニューギニア南部
高地の事例から」『史苑』1974、34（2）74－
81 立教大学史学会